

Ⅲ 平成 16 年の結果

1 がん死亡

(1) 部位別死亡数

がんが原死因であった死亡について部位別に死亡数をみると、男では肺が最も多く、次いで胃、肝臓の順に多かった。女では肝臓が最も多く、次いで胃、肺の順に多かった（図 3-1・図 3-2、付表 7 参照）。

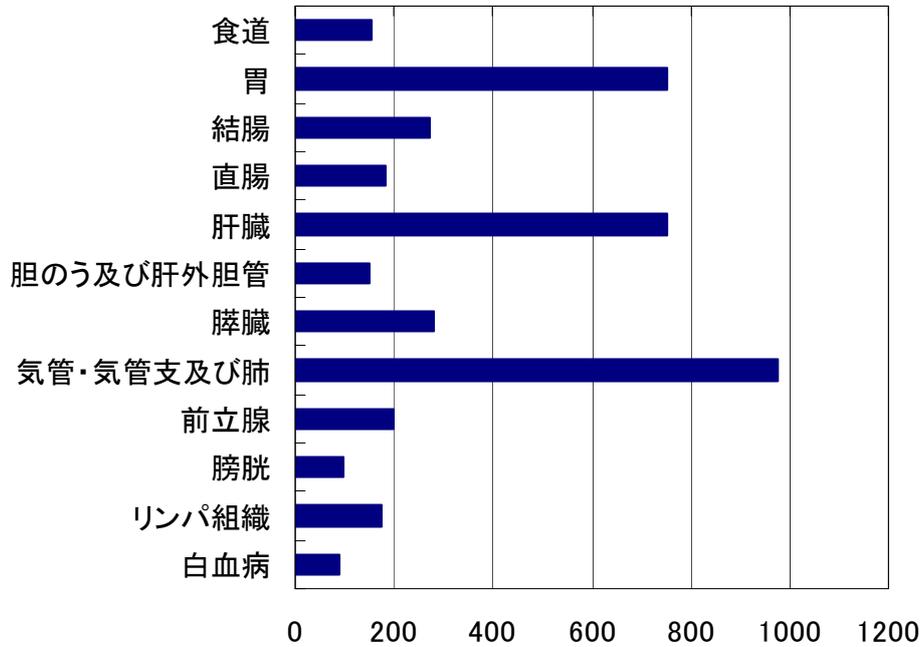


図 3-1 部位別がん死亡数（男）

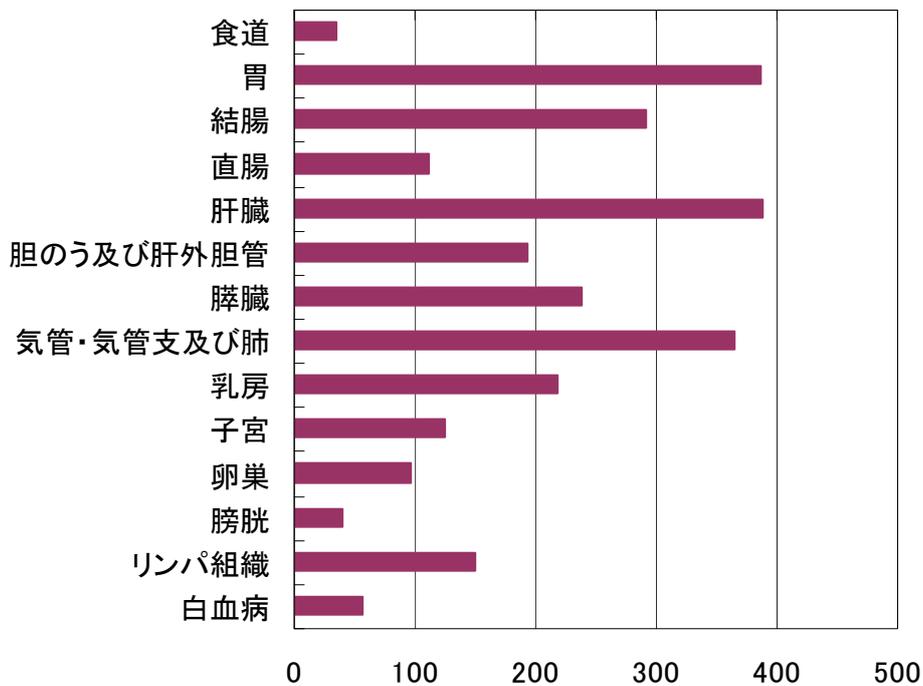


図 3-2 部位別がん死亡数（女）

(2) 全国との比較

全国を基準とする標準化死亡比は全部位で、男が 0.99、女が 0.97 であった。死亡数の多い部位のうち、男女とも肝臓の標準化死亡比が高かった。(図 3-3・図 3-4)

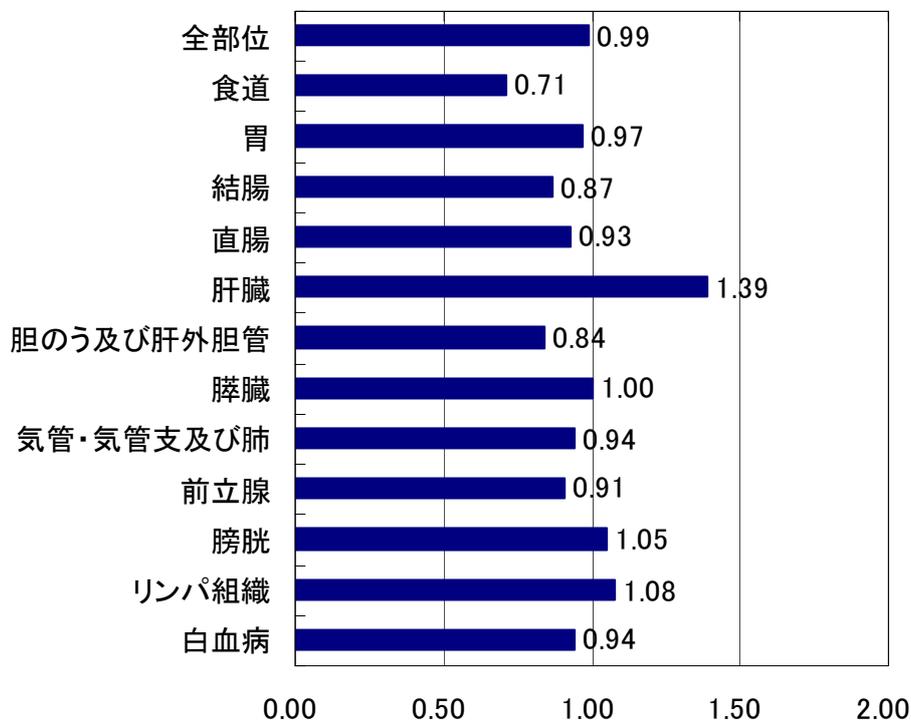


図 3-3 部位別標準化死亡比（男、全国を基準）

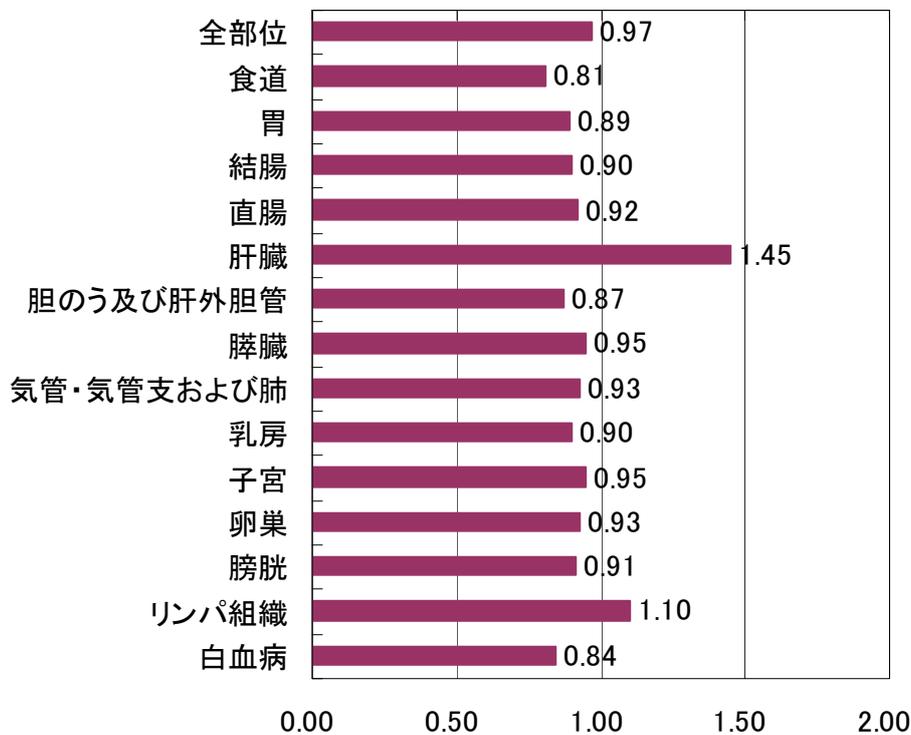


図 3-4 部位別標準化死亡比（女、全国を基準）

2 がん罹患

(1) 部位別がん罹患数

がん罹患数を部位別にみると、男では胃が最も多く、次いで肺、前立腺の順に多かった。女では乳房が最も多く、次いで胃、結腸の順に多かった（図3-5・図3-6、表1-A参照）。

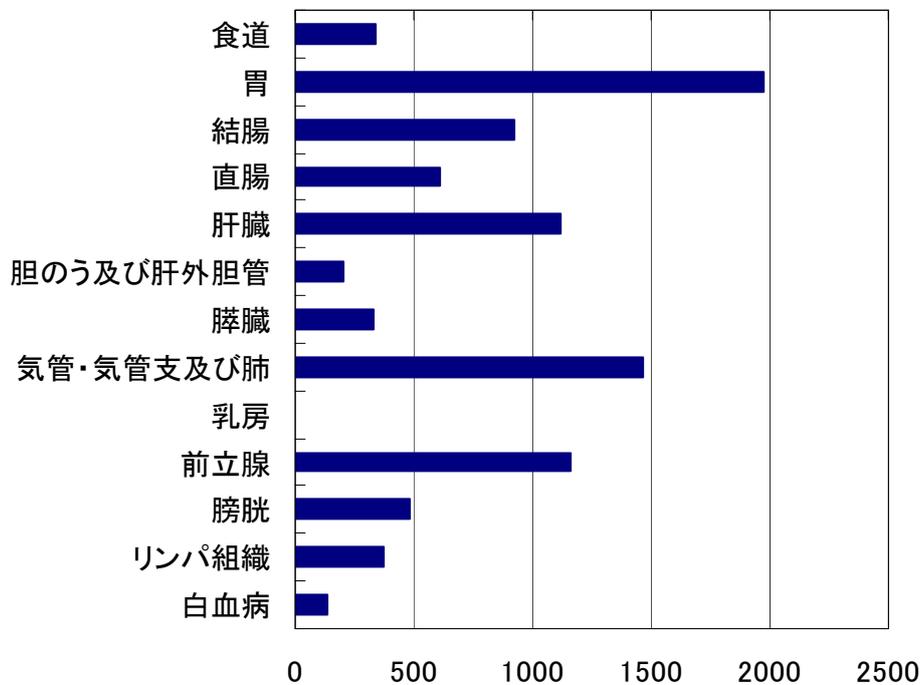


図3-5 部位別がん罹患数（男）

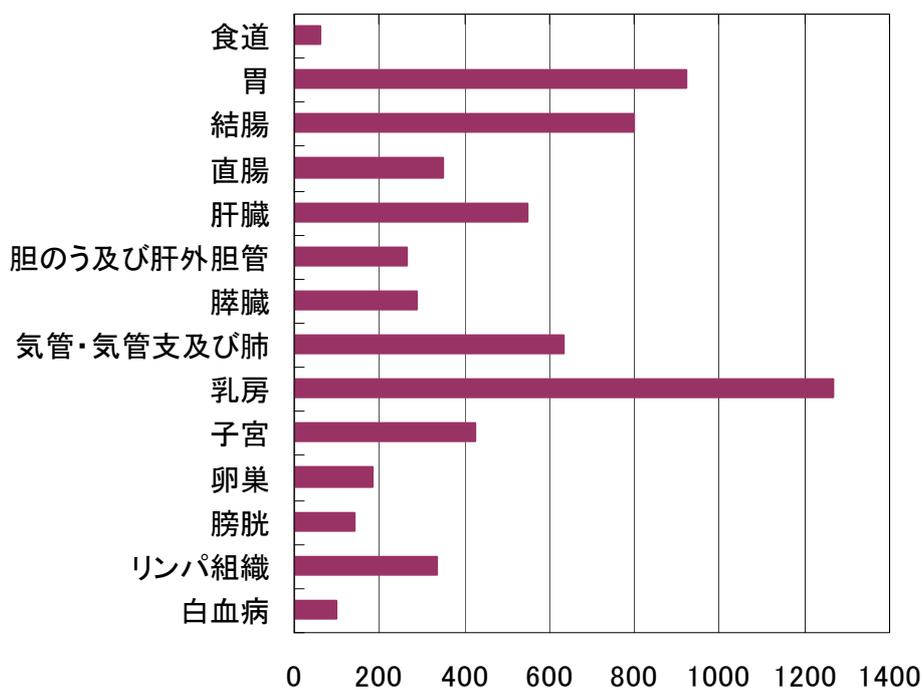


図3-6 部位別がん罹患数（女）

(2) 年齢階級別がん罹患率

性別年齢階級別がん罹患率をみると、40～44歳、45～49歳、50～54歳の年齢階級などでは男より女の罹患率が高く、それ以上の年齢階級では女より男の罹患率が約2倍高かった（図3-7、表2参照）。

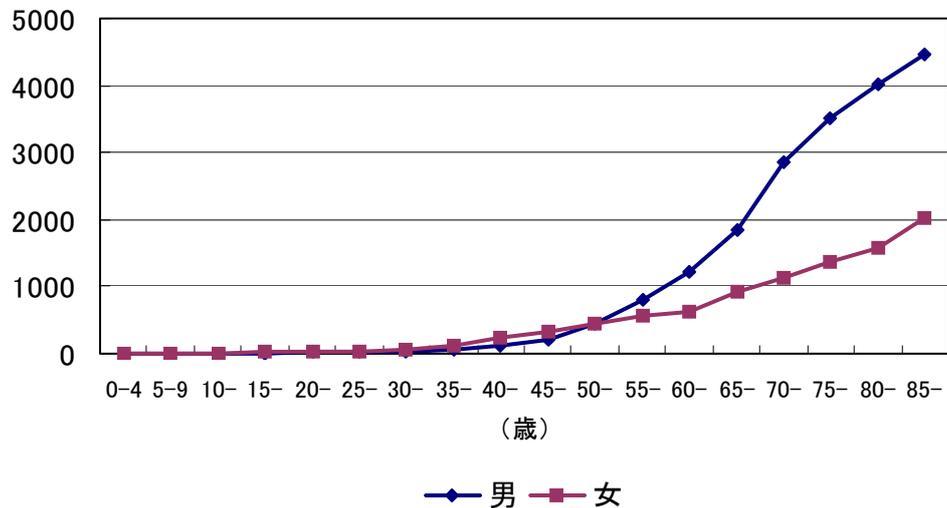


図3-7 年齢階級別がん罹患率 (人口10万対)

(3) 発見経緯

部位別に発見経緯をみると不明者の割合が高かったが、判明者中の分布をみると大腸、肺、乳房などで、がん検診の割合が高かった。ただ、判明者の割合が低いので、結果の解釈には注意が必要である（図3-8・図3-9、表3参照）。

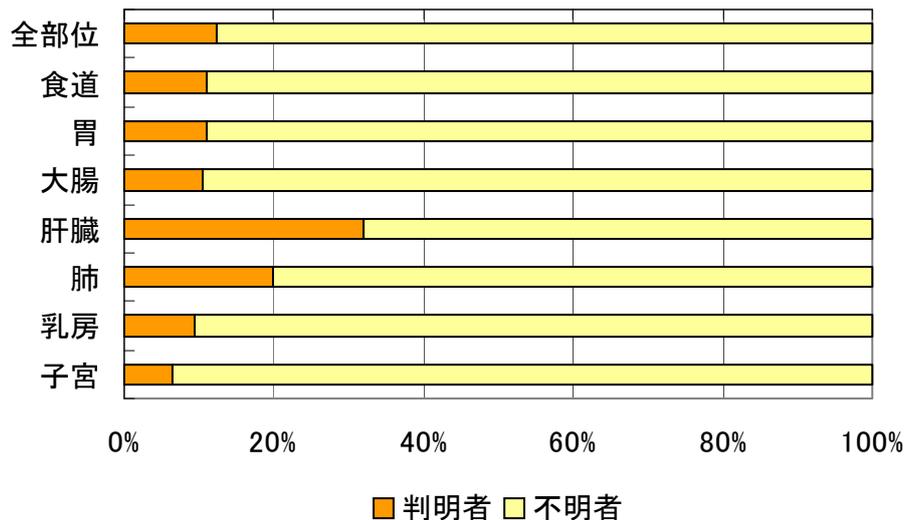


図3-8 部位別発見経緯判明者の割合

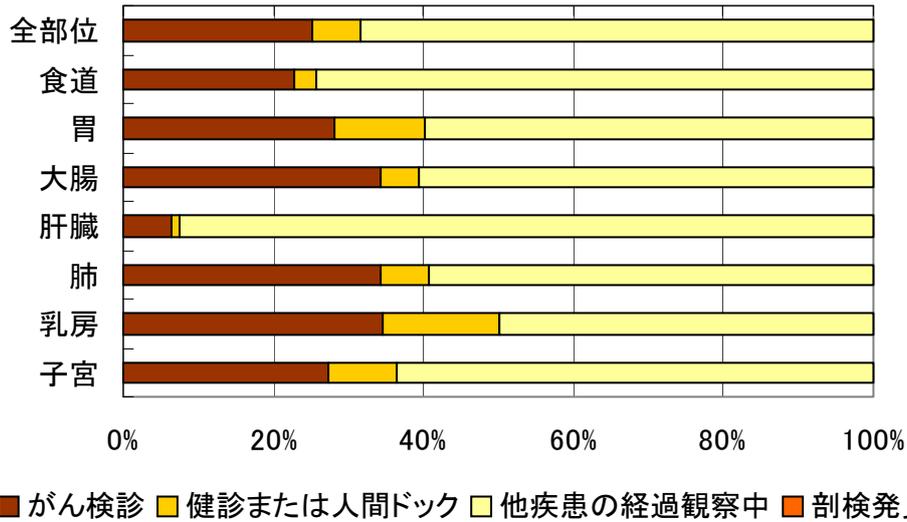


図3-9 部位別発見経緯（判明者中の分布）

—腫瘍登録事業の資料が占める割合が高く、発見経緯判明者の割合が低くなっており、結果の解釈には注意が必要である—

(4) 臨床進行度

部位別に臨床進行度をみると全体に不明者の割合が高かったが、肝臓、膵臓、肺などでは判明者の割合が比較的高かった。判明者中の分布をみると、限局の割合が肝臓や膀胱で高く、膵臓で低かった（図3-10・図3-11、表4参照）。

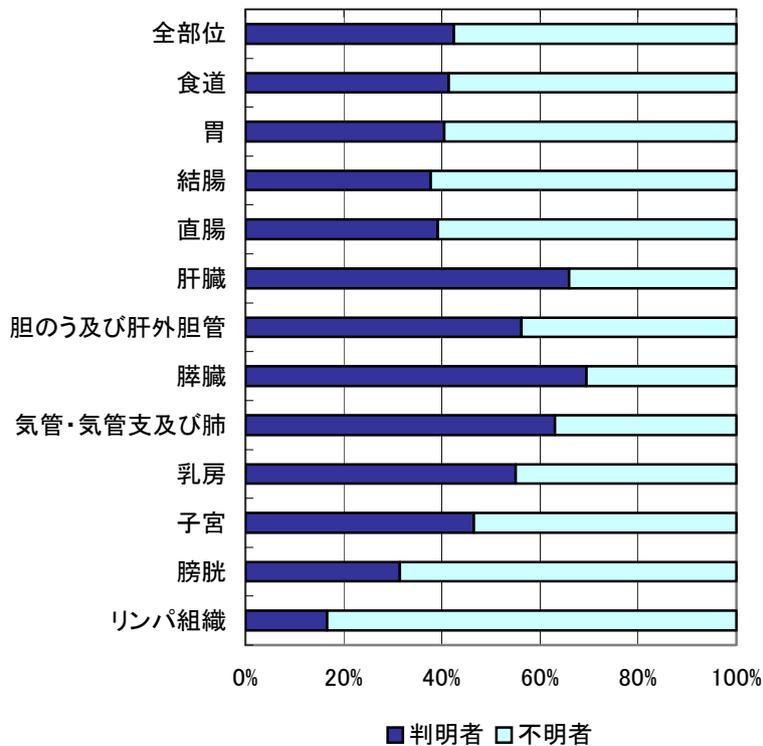


図3-10 部位別臨床進行度判明者の割合

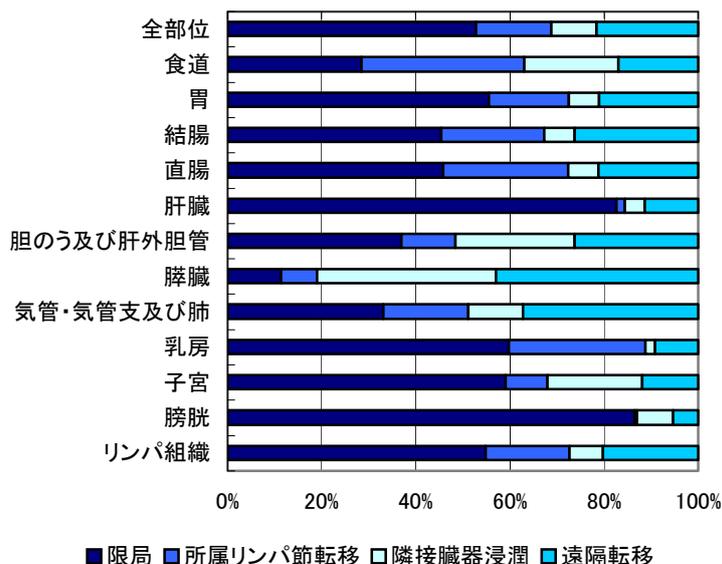


図3-11 部位別臨床進行度（判明者中の分布）

—腫瘍登録事業の資料が占める割合が高く、臨床進行度判明者の割合が低くなっており、結果の解釈には注意が必要である—

(5) 受療割合

部位別に受療割合をみると、乳房で切除の割合が高く、白血病で化学療法（化学療法・免疫療法・内分泌療法）の割合が高かった（図3-12、表5参照）。

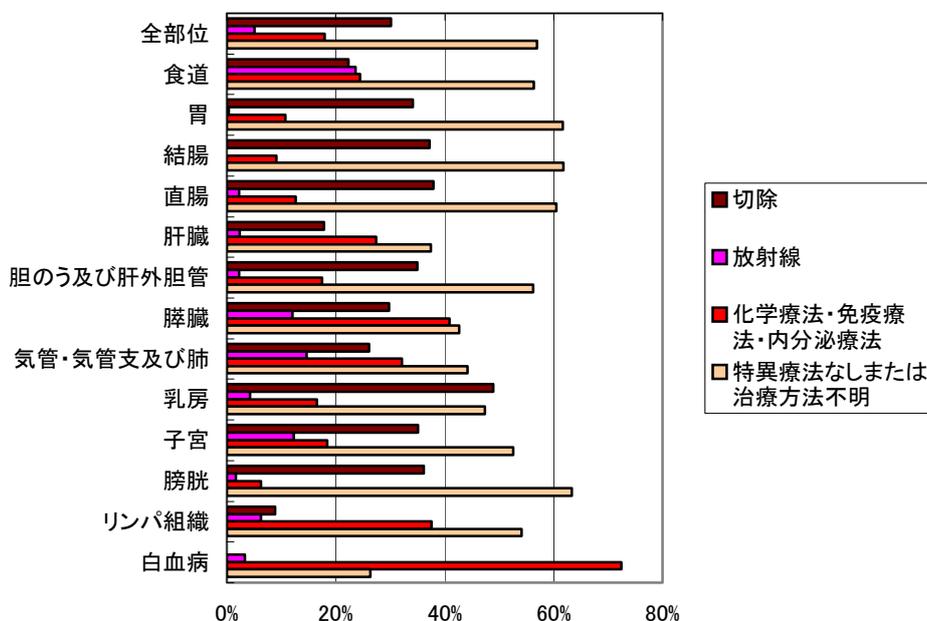


図3-12 部位別受療割合

—腫瘍登録事業の資料が占める割合が高く、治療方法不明の割合が高くなっており、結果の解釈には注意が必要である—